

金子彦二郎読本にみられる書簡文教材の一考察

A Consideration of Epistolary Educational Materials in the Tokuhon,
an old Japanese textbook, edited by Hikojiro Kaneko

中 嶋 真 弓

Mayumi NAKASHIMA

1. 問題の所在と目的

高等女学校の作文教育に尽力した人物の一人に金子彦二郎がいる。金子彦二郎は、作文教科書、読本等を編集するとともに自己の実践を論文として発表している。刊行物の中には、『手紙文実習講話』（金子彦二郎,1935）もある。金子彦二郎は、女生徒たちの作文嫌い、作文への苦手意識を払拭し、自由に豊かに書くことができるよう作文指導にあたっている。

金子彦二郎の作文教育にいち早く注目したのは野地潤家である。野地潤家（1998a）は、1915年から1916年にかけて金子彦二郎が実践報告した作文教授について「基本の考えがしっかりしており、実際の作文教授の方法も柔軟でいきいきとして、作文教授の核心に迫っている」（p.244）と述べている。また、野地潤家（1998b）は金子彦二郎を作文科授業に熟達し、豊富な教授経験を積んでおり、授業構想力があるとも評している（p.207）。田中宏幸（2008）は、野地潤家が金子彦二郎に早くから注目していたと述べた上で、金子彦二郎については「金子が教育生活の出発点の段階から、インベンション（創構）に強い関心を持ち、生徒の発想・着想を育てることに力を注いできたことがよく分かる。」（p.32）と述べ、金子彦二郎が作文指導で行った「暗示的指導」については「素材に関連する話題を数多く想起させるとともに、その中から独自の題材を探し、中心的になることがらを発見させる指導」（p.60）と説明している。

では、作文教育を重視した金子彦二郎は、読本の中に長きにわたり作文教育の教授内容であった書簡文を、どのような役割をもたせ採録したのであろうか。

そこで、本稿では、先行研究を踏まえた上で、金子彦二郎の読本に採録されている書簡文教材の役割を明らかにすることを目的とする。これを明らかにすることが、作文教科書との関連につながり、1930年代の国語科教科書史における書簡文教材の役割を史的に位置付ける一助になると考えるからである。

2. 金子彦二郎読本にみられる書簡文の役割

金子彦二郎は、高等女学校読本として、『昭代女子国文全10冊』を編集している。本章では、

1933年初版、1937年修正三版、1938年版、1939年版、1940年修正3版の5回にわたり発行された読本の書簡文を、内容の特徴、文末文体および頭語・結語の特徴の2観点から比較、分析し、役割を明らかにする。なお、表記は1933年版、1937年版等とする。

2.1 内容の特徴

採録された書簡文がどのような内容であったかを〈表1-1〉、〈表1-2〉に整理した。なお、1938年版、1939年版、1940年版は、1937年版と比較して書簡文採録の有無を○、×で表記した。1933年版と1937年版を比較すると、1937年版の書簡文が増加していることが分かる。

〈表1-1〉金子彦二郎『昭代女子国文』の書簡文教材

1933年版 (S8.8.26)						
巻	課数・課名	文体	字体	内容項目	頭語(冒頭)	結語(末尾)
1	4 叔母さまもきつと(手紙)[現代女子作文]	口語文体	楷書	報知	叔母さまー先日は御手紙有り難うございました。	さやうなら。
	16 海水浴場から(手紙)[旅からの手紙](千山万水族からの手紙)	口語文体	草書	報知:旅信	父上様には御無事に越後からお帰り遊ばした由私ども一同安心致しました	さよなら
	21 伊勢参宮(手紙)五十嵐力(我が書翰)	口語文体	楷書	報知	俄に参宮を思ひ立つて、	着きました。
2	13 妙に心がそは／＼して(手紙)[新しい手紙文]	口語文体	楷書	年頭挨拶	きぬ子さまーほのぼのと東の空が白んで来て、	お過ごしなさいませね。
	20 書物に添へて(手紙)[新しい手紙文]	口語文体	草書	謝礼(礼状)	御本ありがとうございました	かしこ
3	7 絵の好きな友に(手紙)[趣味の文章]	混合文体	楷書	報知	垣根添ひに、実生楓の若葉美しき日曜の朝にて候。	給ひてよ。
	13 金剛杖をつきながら(手紙)[少女模範文]	口語文体	楷書	報知	M子様御無沙汰致しました。	さやうなら。
	16 颯風見舞の御禮(手紙)[少女模範文]	口語文体	草書	見舞の返事	光子様！お見舞有難うございました	かしこ
4	3 空虚の中を秋の車が(手紙)九條武子(九條武子夫人書翰集)	口語文体	楷書	見舞の返事	雨かと思ふほど、落葉の音が烈しうなりました。	かしこ
	11 仙臺より東京なる妹へ(手紙)高山樗牛(樗牛全集六巻)	混合文体	楷書	報知	この頃はしばしの間の御面会ながら、まことに／＼御うれしく、	早々
5	5 ジャがたら文(手紙)はる女	混合文体	楷書	報知	前業とは申しながら、	あら、日本恋しや、ゆかしや。
	16 郷友に(手紙)野口英世(野口英世博士傳)	候文体	楷書	依頼	謹んで一書捧呈仕候。	願上げ奉り候。
	22 富士見高原にて(手紙)渡邊とめ子(女流名家書簡選集)	口語文体	草書	報知	都の生活にはなれて	参りたいと思うてゐます
6	9 月の出に阿弥陀様が(手紙)大月桂月(書簡点描 偉人天才を語る)	候文体	楷書	報知:旅信	「山は富士、湖水は十和田湖。」と私は常に申居候。	徹夜致し居り申候。
	17 鳥なる父へ(手紙)[源平盛衰記](源平盛衰記卷十一)	混合文体	楷書	報知	その後頼りなき孤兒となりはてて、御行方もも承る便りもなし。	あなかしこ／＼。
	22 初雛を祝ひて・同じく返事(手紙)[通俗書簡文]					
	1 初雛を祝ひて(通俗書簡文)	候文体	楷書	贈呈	日ごとのどかに成り増り候。	かしこ
	2 同じく返事(通俗書簡文)	混合文体	楷書	贈呈のお礼	御こゝろ入れのお祝ひ物、～かたじけなさ。	かしこ
7	5 修学旅行先から母へ(手紙)中原綾子(婦人書翰文範)	口語文体	楷書	報知	昨夜十時半に～着きました。	では、かあ様ごきげんよう。皆様にもよろしく。
	22 逝ける友の母へ(手紙)西條八十(婦人書翰文範)	口語文体	楷書	弔慰	信子様御逝去あそばされましてよりの	かしこ。
8	5 以て奥に談ずべし(手紙)正岡子規(子規集第九巻)	混合文体	楷書	依頼の返事	拜復	己上
	23 身の上を案ずる教へ子に(手紙)大妻コタカ(女流名家書簡選集)	口語文体	楷書	報知の返事	御手紙を嬉しく拝見いたしました。	さらばまち子さま、お大事に遊ばせ。
9	書簡無し					
10	書簡無し					

内訳をみると、1933年版の巻9には採録がなかったが、1937年版には3通採録があり、巻8においても2通から6通と増加している。1937年版と1938年版では書簡文を扱った二つの課(書簡数では5通)が削除され、1939年版では、さらに一つの課(書簡数2通)が削除されている。

1939年版と1940年版に変化はない。書簡数採録の割合は、1933年版8.3% (21/252)、1937年版8.8% (26/295)、1938年版7.4% (21/285)、1939年版と1940年版が6.9% (19/275)で、1937年版が8.8%と最も高くその後減少している。なお、一つの課に2通採録されている場合は、課数を2とした。1933年版から1937年版にかけて採録書簡文が増加している理由として、法令によるものと金子彦二郎の書簡文に対する考えが関わっているものと考えられる。

(表1-2) 金子彦二郎『昭代女子国文』の書簡文教材

1937年版 (S12.9.11 修正三版)						1938年版	1939年版	1940年版	
巻	課数・課名	文体	字体	内容項目	頭語(冒頭)	結語(末尾)	巻 課の有無	巻 課の有無	巻 課の有無
1	19 海水浴場から(手紙)(千山万水族からの手紙)	口語文体	草書	報知・旅信	父上様には御無事に越後からお帰り遊ばした由私ども一同安心致しました	さよなら	1	1	1
	27 伊勢参宮(手紙)五十嵐力(我が書翰)	口語文体	楷書	報知	俄に参宮を思ひ立つて、	着きました。	○	○	○
2	17 物に添へて(手紙)								
	1 母へ 村岡花子	口語文体	楷書	贈答	今年の寒さは格別のやうに感じられますので、	求めてまゐりました。	○	○	○
	2 自ら畫がき彫り候もの 九條武子	候文体	楷書	贈答	御すこやかに渡らせられ、めでたく存じ上げ候。	かしこ。	○	○	○
	3 柿に添へて 長塚節(山鳥の渡)	候文体	楷書	贈答	耶馬溪の名物、巻柿といふものを一つ差上げ申候。	旅行も暑くて困却致し居候。	○	○	○
3	8 短信二章(手紙)								
	1 新茶をおくる(婦人の手紙)	口語文体	楷書	贈答	白の手拭赤襦、口々に茶摘唄をうたひながら～摘んで見ました。	御笑覧下さい。	○	○	○
	2 見送の御禮 中河幹子(肉筆ハガキ文集)	口語文体	楷書	謝礼(礼状)	郷子様 出発の時はお見送り下さつて、ほんたうに有難う御座いました。	かしこ。	○	○	○
	22 絵を好む友に(手紙)「趣味の文章」の文による	混合文体	草書	報知	垣根添ひに、実生楓の若葉美しき日曜の朝にて候。	給ひてよ。	○	○	○
4	9 空虚の中を秋の車が(手紙)九條武子(九條武子夫人書翰集)	口語文体	楷書	見舞の返事	雨かと思ふほど、落葉の音が烈しうなりました。静岡から御便りを有り難うございます。	かしこ	○	○	○
	19 仙臺より東京なる妹へ(手紙)高山樗牛(樗牛全集六)	混合文体	楷書	報知	この頃はしばしの間の御面会ながら、まことに／＼御うれしく、	早々	○	○	○
5	10 ジャがたら文(手紙)はる女(新撰書簡集)	混合文体	楷書	報知	前業とは申しながら、	あら、日本恋しや、ゆかしや。	○	○	○
	19 富士見高原にて(手紙)渡邊とめ子(女流名家書簡選集)	口語文体	草書	報知	都の生活にはなれて	参りたいと思つておます	○	○	○
6	12 月の出に阿弥陀様が(手紙)大月桂月(書簡点描 偉人天才を語る)	候文体	楷書	報知・旅信	「山は富士、湖水は十和田湖。」と私は常に申居候。	徹夜致し居り申候。	○	○	○
	18 鳥なる父へ(手紙)[源平盛衰記](源平盛衰記卷十一)	混合文体	楷書	報知	その後頼りなき孤児となりはてて、御行方をも承る便りもなし。	あなかしこ ／＼。	○	○	○
	25 初雛を祝ひて・同じく返事(手紙)樋口一葉(通俗書簡文)								
	1 初雛を祝ひて(通俗書簡文)	候文体	楷書	贈答	日ごとのどかに成り増り候。みな／＼様いど御機嫌よう渡らせ給ふらんと御嬉しく存じ候。	かしこ	○	○	○
	2 同じく返事(通俗書簡文)	混合文体	楷書	贈答のお礼	御こころ入れのお祝ひ物、～かたじけなさ。	かしこ	○	○	○
7	5 修学旅行先から母へ(手紙)中原綾子(婦人書翰文範)	口語文体	楷書	報知	昨夜十時半に～着きました。	では、かか様ごきげんよう。昔様にもよろしく。	○	○	○
	6 病床はがき便り(手紙)菅原三枝								
8	1 え喉はぬ葡萄	口語文体	楷書	贈答の返事	(俳句) 先月下旬から胃痛をおこして、	婦洛拝見の日を待つておます。	×	×	×
	2 陽春の此の期に	口語文体	楷書	見舞の返事	御葉書ありがとうございます。	では、又。	×	×	×
	3 「お茶の水から」が只今	口語文体	楷書	贈答の返事	金子先生 心待ちにしておました「お茶の水から」が、只今到着いたしました。	ありがたい、 ／＼。	×	×	×
	15 姉徳について論ず(手紙)[女庭訓往来]								
	1 をこの文字ならで(女庭訓往来)	混合文体	楷書	忠告	世のまつりごとたゞしく、	あなかしこ。	○	×	×
	2 女はうへはまろく(女庭訓往来)	混合文体	楷書	忠告の返事	此の頃はおほやけ私いとまあるころほひにて、	あなかしこ。	○	×	×
	26 私尚ほ男児三人有レ之(手紙)山内ヤス(東京日日新聞)	混合文体	楷書	報知	拜啓	御心安く思しめ下さいませ。	○	○	○

10	白雲尼より千枝子へ(手紙) 倉田百三									
9	1 白雲尼より千枝子へ(女人往 生集)	口語文体	楷書	報知の返事	千枝子様。禪堂の夜は更けました。	これだけはいつ でも大事ですね。	×	×	×	×
	2 千枝子より白雲尼へ(女人往 生集)	口語文体	楷書	報知の返事	なつかしきお手紙、アパートから出 かけに受けとり、～読みました。	お身お大事に求 法辨道願ひます。	×	×	×	×
	17 代筆は浮世の闇(手紙) 井原 西鶴(万の文反古)	混合文体	楷書	忠告	帰膺、越路の春をしたひ、	以上	○	○	○	○
10	書簡無し						10	10	10	

先ず、法令では、金子彦二郎の読本が発行された時期と「高等女学校及実科高等女学校教授要目」が公布された時期を重ねてみると次のようになる。

高等女学校の教授要目は、1903年「高等女学校教授要目」(以後、要目①と記す。以後同様に略記)、1911年「高等女学校及実科高等女学校教授要目」(要目②)、1932年「高等女学校及実科高等女学校教授要目中改正」(要目③)、1937年「高等女学校及実科高等女学校教授要目中改正」(要目④)の4回発令されている。初版本である1933年版は、1932年に公布された要目③に則った内容であるが、要目③の内容は公民科を加える改正であり国語科の教科内容に関する記述はない。つまり、1933年版は要目②に則った内容ということである。

要目②には、書簡文について講読における教材の程度として「講読ノ材料ハ普通文ヲ主トシ口語文・書牘文・韻文ヲ交フ(中略)書牘文ハ平易ニシテ繁縟ニ失セス日用書牘文ノ模範トスヘキモノタルヘシ」とある。そして、作文教材の程度では「作文ハ現代文及書牘文ヲ主トシ」とある。前者の講読における教材の程度は同年に発令された「中学校教授要目改正」と同様の内容であるが、後者の作文の程度は「中学校教授要目改正」では「作文ハ現代文ヲ主トシ口語文及書牘文ヲ併セ課スヘシ」とあるのに対して、高等女学校は「書牘文ヲ主トシ」とあることから、法令からも女子作文の中心が書簡文を書くことにあるといえる。それが、1933年版の冒頭の「はしがき」からも分かる。「はしがき」には、書簡文について次のように記されている。

本書は、(中略)現世界に於ける太陽的存在たる日本精神・皇国意識の高調と、日本女性の本質的性情たる燃ゆるが如き人間愛の発揚とを、根幹底流として組織してあります。

1(本書の特色の主なるものは引用者補)優雅で清麗な日本女性の作品と、清新で情味あり而して又実生活に即した書簡文を、比較的多く採録してあること。(下線は引用者)

次に発行された修正本1937年版は要目④に準拠した内容であるが、要目④には書簡文についての文言はみられない。よって、次に引用する1937年版の「はしがき」にも書簡文の記述はない。

前著(初版本のこと引用者補)に於て己に「皇国意識・日本精神の高調」をば、其の編纂方針の根幹底流として力説し来つた所であります。本改訂版に於ては、「我が国民性の自覚」の一項と共に、更にそれらにつき、我等の敬愛する祖先達が伝へ貽してくれた醇美な精神的遺産中から、組織的に且つ多角的にこれを接取し按排致しました。

初版本には「実生活に即した書簡文を、比較的多く採録」とあるが、修正本にはみられない。しかし、前述したように書簡文の記述はないものの1937年版は8.8%という高い割合で採録されている。なぜ1937年版に書簡文が多く採録されているのであろうか。それは、金子彦二郎の書簡文に対する考えによるものといえる。金子彦二郎(1938a)は、『昭代女子国文』の参考

書として『昭代女子国文教授要領2』を発行している。この中に2-17（巻2の17課のこと、以後同様）「物に添へて」の課の解説として、次のように述べている。

本課は何れも他に対する感謝又は行為の誠心を表はした一物を贈るに添へた短い手紙である。即ち、内容上には人をして感謝の心に生かしめ、形式上からは、その具現の種々相を伝えて実生活への興味と体験への易行道を得させようとするものである。この事は、人生にうるはしさを与へ『女子ノ善行美德』を奨むることであり、『婦徳ヲ達成』することであり、『家庭生活ノ趣味ヲ向上セシムル』ことともなつて、改正要目の趣旨に添ふことは今更詳説を要しない。人生生活の中にあつて最も大切なものは感謝の心である。(p.269)

金子彦二郎が、ここで述べている改正要目とは要目④のことである。つまり、前述した要目④が求めた女性像を目指す上で、相手への思いやりの心を育て、言葉遣いの鍛錬となり、祖先からの精神的遺産を受け継ぐにふさわしい教材として金子彦二郎は書簡文を重視したのではないかと考えられるのである。

〈表2〉 1933年版から1940年版までの内容項目の変遷

内容項目	1933年版		1937年版		1938年版		1939年版		1940年版	
	書簡数	割合	書簡数	割合	書簡数	割合	書簡数	割合	書簡数	割合
報知	9	42.9%	8	30.8%	8	38.1%	8	42.1%	8	42.1%
報知(旅信)	2	9.5%	2	7.7%	2	9.5%	2	10.5%	2	10.5%
年頭挨拶	1	4.8%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%
謝礼(礼状)	1	4.8%	1	3.8%	1	4.8%	1	5.3%	1	5.3%
依頼	1	4.8%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%
贈答	1	4.8%	5	19.2%	5	23.8%	5	26.3%	5	26.3%
弔慰	1	4.8%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%
忠告		0.0%	3	11.5%	3	14.3%	1	5.3%	1	5.3%
見舞の返事	2	9.5%	2	7.7%	1	4.8%	1	5.3%	1	5.3%
贈答の返事	1	4.8%	3	11.5%	1	4.8%	1	5.3%	1	5.3%
依頼の返事	1	4.8%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%
報知の返事	1	4.8%	2	7.7%		0.0%		0.0%		0.0%
合計	21	100.0%	26	100.0%	21	100.0%	19	100.0%	19	100.0%

そして、それは、採録書簡文の内容の中で贈答が報知の次に多く採録されていることから看取できる。

採録された書簡文の内容から内容項目を設定し〈表2〉に整理した。1933年版

と1937年版を比較すると、1937年版では贈答と贈答の返事が増加し、1933年版にみられなかった忠告が採録されている。贈答の増加は日常生活の中で書く機会がある事柄であり実用的な書簡として取り上げられたものと考えられるが、金子彦二郎が書簡文を書くときに重視した心構えと女生徒に書簡文を書かせるための意欲付けの両面から採録したものと考えられる。前者の書簡文を書く時に重視した心構えにおいては、前述した「内容上には人をして感謝の心に生かしめ、形式上からは、その具現の種々相を伝えて実生活への興味と体験への易行道を得させようとするものである。この事は、人生にうるはしさを与へ『女子ノ善行美德』を奨むることであり、『婦徳ヲ達成』することであり、『家庭生活ノ趣味ヲ向上セシムル』ことともなつて、改正要目の趣旨に添ふことは今更詳説を要しない。人生生活の中にあつて最も大切なものは感謝の心である。」(p.269)や『手紙文実習講話』の中で「私どもの社交生活と離るべからざる一つの人間的な営みは、物を贈つたり贈られたりと言ふことである」(p.443)としている文言から、人間生活において感謝の心が重要であり、その一つの表れが贈答だというのである。そして、その行為が女子の「美

徳」「婦徳」となるとしているのである。そのような意味において、女性にとって感謝の心を表出する一つの行為として贈答があり、その書簡文が多く採録されたといえる。後者の書簡文を書かせるための意欲付けにおいては、金子彦二郎が書簡文の返信を重視していることに関わっているといえる。金子彦二郎（1935）は『手紙文実習講話』の中で次のように述べている。

多くは手紙といふと、きまつたやうに目上の人に向つて申し送る課題が多く、いつも／＼四角張つたことを言はなければならぬもの、堅苦しいことを書かなければならぬもの、と言ふやうな感じを懐かせる作例ばかり練習させてある。それからもう一つは、此方からやる手紙ばかりを書かせて、向ふから来たものに対する返事などといふものの練習は殆ど試みられなかつたのであります。とにかく目上に対する堅苦しきや、いつも／＼同種の手紙ばかりでは、練習する方でも二三回すると種切れになるので厭気がさして来ます。それが向ふから来た手紙の返事でも書くとなると、先方の出様次第で、それに対応した返事を書くのですから、其の千変万化に伴ふ興味も出ようと言ふものですが、何時もこちらから、いや病気の友達を慰めるとか、いや運動会の様子を知らせるとか言つたものばかり書くことにきまつて了ふと、其の単純さからつい厭気がさしてしまふ。要するに、練習課題が余り實際生活からかけ離れ過ぎてゐたやうであります。（pp.10-11）

金子彦二郎は返信を書かせる教授がなされていないことを指摘するとともに、返信には相手に応じた書き方が必要でありそこに女生徒の興味を引き出すことができるという理由から、返信を書かせることを重視していたのである。何か贈られたら必ず返事を書く、そしてそれは贈られた品物や贈り主の思い、状況等によって返信の内容は違ってくる。つまり書き手の創意工夫がより求められるのであり、女生徒の意欲、書く内容の幅を広げる題材として効果があるということから採録したと考えられるのである。以上のように感謝の気持ちの重視、返信を書くための効果的な題材として贈答の書簡文を多く採録したと考えられる。そして、それは1937年版に『女庭訓往来』を出典とする書簡文2通が採録された理由ともつながるといえる。

忠告で採録されているものは、8-15「婦徳について論ず（女庭訓往来）」の課の8-15-1（8-15の1通目のこと、以後同様）「をのこ文字ならで」、8-15-2「女はうへはまろく」と9-17「代筆は浮世の闇（万の文反古）」（井原西鶴）の3通である。9-17は、井原西鶴の書簡小説の1篇で、因果の鉄則について記したものである。金子彦二郎（1938b）『昭代女子国文教授要領巻9』によれば、「因果律が社会を律する力は実に道德律以上であるかも知れぬ。積善の家に余慶殺生すれば畜生に生れる等の格言俚言は人の心理を強く支配して来たものである。作者は此の因果律のあまりにも観面にして且深刻な此の事実を黙過し得ず自他共に戒心すべき適例として之を筆にしたものではあるまいか」（p.135）とある。この書簡小説の忠告は女生徒に特化した内容ではないが因果律の恐ろしさを描くことによって、正しい生き方を悟らせるようにしているといえる。

同様の内容項目忠告として採録されている8-15「婦徳について論ず」の出典は『女庭訓往来』である。『女庭訓往来』について1937年版の頭注に「作者不詳 家庭の訓誨ともなるべき事柄を、贈答の書簡文の体に記したる庭訓往来になぞらへ、特に女子の為に作られし書」（巻8 p.85）とあるように、女性への教訓、有様を示した内容の書簡文である。贈答が感謝の心の表れであり、

それが女性としての美德、婦徳となるとしているのである。つまり、女性にとっての有様を示す題材として女訓の書簡文を採録したのである。では、なぜ女性の有様を示す必要があったのであろうか。1937年版が発行された年は、日中戦争がはじまり、文部省が『国体の本義』を発行した年でもある。『国体の本義』の冒頭には「大日本帝国は、万世一系の天皇皇祖の神勅を奉じて永遠にこれを統治し給ふ。これ、我が万古不易の国体である。而してこの大義に基づき、一大家族国家として億兆一心聖旨を奉体して、克く忠孝の美德を発揮する。これ、我が国体の精華とするところである」(p.9)と記されている。また、「我が国は一大家族国家であつて、皇室は臣民の宗家にましまし、国家生活の中心であらせられる。臣民は祖先に対する敬慕の情を以て、宗家たる皇室を崇敬し奉り、天皇は臣民を赤子として愛しみ給ふのである」(p.47)ともある。この精神が、当時の読本に反映されているといえる。『国体の本義』の本文には、男女の表記はなく、国民、臣民等で記されている。つまり、女性も一大家族国家の一員という位置付けである。そして、その組織の一員として女性がどうあるべきかが読本に示された『女庭訓往来』といえる。

また、『国体の本義』には国語の項目があり、その中で書簡文について次のように述べられている。

国語は主語が屢々表面に現れず、敬語がよく発達してあるといふ特色をもつてゐる。これはものを対立的に見ずして、没我的・全体的に思考するためである。(中略)恭敬の精神は、固より皇室を中心とし、至尊に対し奉つて己を空しうする心である。おほやけに対するにわたくしの語を以て自称とし、古くから用ゐられる「たまふ」、或は「はべる」「さぶらふ」等の動詞を崇敬・敬讓の助動詞に転じて用ゐる如きがこれである。而してこの「さぶらふ」「さむらふ」といふ文字から武士の意味の「侍」の語が出たのであり、書簡文に於ける候文の発達となつた。今日用ゐられてゐる「御座います」の如きも、同様に高貴なる座としての「御座ある」と、「いらつしゃる」「御出でになる」といふ意味の「います」から来た「ます」からなつてゐるのである。(p.99)

言葉には、日本の歴史、日本人の心や日本人の有様が込められていることが分かる。このような意味においても、1933年版に候文体が3通(14.3%)であったのが、1937年版では、4通(15.4%)に増えているのも戦時下において候文を読ませる必要があったといえる。金子彦二郎(1935)は『手紙文実習講話』の中で、樋口一葉の「初雛を贈る」の原作と生徒が「初雛を贈る」の作品を口語体に翻案した書簡文を対比して載せている。そして「候文の名作などをよく玩味して、それに口語体の新しい衣装をつけさせる練習をして見ますと、候文の解釈力と、よい手紙文を得ることの両方面から利益することが多い」(p.267)としている。このような相互補完の関係による採録の在り方から、候文の役割を、よい書簡文の手本である候文を読み解くための力、候文のよさを生かしながら口語文体を書く力を育成する題材と捉えることができる。そして、そこには、候文体がもつ日本語のよさ、祖先の精神的遺産を体得させる意図があったことが看取できるのである。

しかし、『女庭訓往来』は、1939年版で姿を消すことになる。1939年は第2次世界大戦が勃発した年であるが、女訓の書簡文を採録したにもかかわらず2年の間に削除されたのである。理由

は不明であるが、これらの書簡文に編者が違和感をもったのではないかと考えられる。

以上のように内容の特徴から、金子彦二郎が書簡文を意欲的に書くことができる工夫をしていることが分かる。そして、書簡文によって、女性としての感謝の気持ちを忘れず、女性としての有様を正すといった教訓的な読む題材として採録していることが分かる。つまり、読本に位置付けられた書簡文教材は、意欲的に書簡文を書く、日本語のよさを知る、読んで解釈するという役割を有していたといえる。

2.2 文末文体および頭語・結語の特徴

本節では、1933年版、1937年版と1939年版を中心に文末文体および頭語・結語について比較対照する。文末文体に着目した先行研究には、北澤尚（1999）、茗荷円（2017）などがある。本稿では先行研究を踏まえながら、候文体（文末が「候」で終わる）、文語文体（文末が文語で終わる）、口語文体（文末が口語で終わる）、混合文体（一通の書簡文の中で、文末が統一しておらず混在しているもの）の四種類で調査する。

〈表3〉1933年版・1937年版・1939年版の文体

文 体	1933年版	1937年版	1939年版
口語文体	57.1%(12/21)	50.0%(13/26)	42.1%(8/19)
文語文体	0.0%(0/21)	0.0%(0/26)	0.0%(0/19)
候文体	14.3%(3/21)	15.4%(4/26)	21.1%(4/19)
混合文体	28.6%(6/21)	34.6%(9/26)	36.8%(7/19)

先ず採録されている書簡文の文末文体から文体をみると〈表3〉のようになる。付記するが、1933年版には4通（19.0% 4/21）、1937年版には3通（11.5% 3/26）の毛筆

による提示がみられる。全体的に口語文体の数値が高いものの1937年版から口語文体が減少し、候文体、混合文体が増加している。候文体の書簡文の作者は、九條武子、長塚節、大月桂月、樋口一葉である。読本においては前述したような日本語のよさ、女性の有様、祖先からの精神的遺産等の理由から候文体を読ませる必要があったのではないかといえる。茗荷円（2017）は、この時期の候文体について次のように述べている。

口語文体が定着したとはいえ、候文体がまったく消滅したわけではないという点である。昭和戦中期においても、文例集や女流作家の書簡文で、二〇～二五％程度は見られているのである。また、創作書簡文においては、昭和前期では全く見られなくなっていた候文体が、昭和戦中期に、二・七％と、非常に低い割合ではあるが、再び見られるのである。少数派といえども、明治中期から約半世紀が経っても根強く継続しているということは、候文体ならではの美点、利点があるからこそであろう。候文体の消滅は、時代が「近代」から「現代」に移り変わる戦後までまたねばならなかった。（p.484）

茗荷円（2017）の文言は、書簡文例集、女流作家の書簡文、一般女性の書簡文、創作書簡文の四種類の資料調査による結論であるが、読本においてもその傾向はみられる。時代が下るにつれて口語文体が減少し、候文体が増加していることから、戦時下においての女子教育では、候文体のよさを教授する必要があったと考えられる。金子彦二郎（1917）は、石川県女子師範学校教諭兼訓導及び石川県立第二高等女学校教諭の在勤中の実践を発表した「我が作文教授」の中で候文と口語文について次のように述べている。

- ・候文が書けなかつたら用事を述べ久闊を叙する手段が外に無いのならともかく、候文以上に作るにも読解にも軽易で、且つ達意という方面からいつても、同価値或はより以上の徹底を有つてゐる口語体で書くといふ、手段があるではないか。余は一日も早く世の中の中等教員諸氏が覚醒して、この迂愚な試験問題（候文の問題 引用者補）を提出することを止め（pp.50-51）
- ・時勢の要求必要という最も有力な基調から出発し、確信を以て口語体の書翰を課する必要はなからうか。（p.53）

これは、「我が作文教授」の中の「候文と尋常小学 附入学試験問題」と「書翰代筆に関する統計的研究」の項目の中で述べているものであるが、読本の書簡文教材においては前述したように候文体が増加している。「我が作文教授」が1917年頃に書かれ、読本が1933年頃から発行されたという年代の違いや作文教科書ではなく読本に位置付けられた候文体の書簡文であるという違いはあるものの、金子彦二郎の1930年代の読本の書簡文教材は、言語教材として、書くための手本となる口語文体の書簡文と読むことを通して日本語のよさを感じさせ、読解力を育成させる、さらには、口語文体を候文体のよさを生かしながら書くことができるようにするために候文体の書簡文が必要であったということである。

野地潤家（1998a）は、上記の「我が作文教授」にある金子彦二郎の候文、口語文について「候文の見解にも、また、口語体書翰文のありかたについての所見にも、大正中期という時代の性格が反映していて、まぎれもなく過渡期であったことを語っている。」（p.244）と述べている。

しかし、現実的には昭和期に入ってもなお、金子彦二郎自身候文体を読本に採録している現状がある。野地潤家（1998a）は、「大正初期・中期・後期における旧制高等女学校用作文教科書の共通の骨格として8項目あげているがその中の2項目目には「書翰文」（書牘文）が重視され、数多くの実例が採録され、その作法についてもていねいに説かれていたこと。」（p.304）、7項目には「雅文・候文体位から口語文本位へ推移していったこと。」（p.304）としている。これは、大正期全体の作文教科書の共通であるが、7項目目の内容は、金子彦二郎読本の書簡文においては、逆の傾向にあることが看取できるのである。つまり、書簡文の役割は、作文教科書と読本において差異がみられるということであり、書くことに視点を当てれば、口語文体が中心であろうが、読むため、よりよい口語文体とするために、読本においては候文体も必要であったということがいえる。また、2項目目においても、作文教科書では作法も丁寧に提示されているとしているが、金子彦二郎の読本では後述する文末文体や頭語・結語からも、形式に縛られない自由さが看取できるのである。

次に、頭語、結語についてであるが、頭語は〈表1-1〉〈表1-2〉に、結語は〈表4〉に整理した。頭語・結語が両方とも漢語なのは、1933年版8-5「拝復-己上」の1通だけである。また、頭語、結語のどちらかが漢語のものが1933年版4-11と1937年版4-19の「早々」（結語）（4-11と4-19は同一教材）、1937年版8-26「拝啓」（頭語）と9-17「以上」（結語）である。両読本とも漢語での頭語・結語の提示はほとんどなく、時候の挨拶や直接本文に入るものが多くみられる。付記するが、両読本とも呼びかけから始まるものもみられ、1933年版では「叔母さま一、

〈表4〉1933年版・1937年版・1939年版の結語

結語	1933年版	1937年版	1939年版
かしこ	28.6%(6/21)	19.2%(5/26)	26.3%(5/19)
さやうなら	9.5%(2/21)	0.0%(0/26)	0.0%(0/19)
あなかしこ	0.0%(0/21)	7.7%(2/26)	0.0%(0/19)
さよなら	4.8%(1/21)	3.8%(1/26)	5.3%(1/19)
あなかしこ、／＼	4.8%(1/21)	3.8%(1/26)	5.3%(1/19)
己上	4.8%(1/21)	0.0%(0/26)	0.0%(0/19)
ありがたう／＼／＼	0.0%(0/21)	3.8%(1/26)	0.0%(0/19)
以上	0.0%(0/21)	3.8%(1/26)	5.3%(1/19)
早々	4.8%(1/21)	3.8%(1/26)	5.3%(1/19)
その他	42.9%(9/21)	53.8%(11/26)	52.6%(10/19)

きぬ子様一、M子様、光子様！」(19.0% 4/21)、1937年版では「郷子様、金子先生」(7.7% 2/26)がみられる。結語では、三読本とも「かしこ」が多く使われているが、「その他」が最も多いことが分かる。読本において頭語と結語どちらも定型のことばではなく、時候の挨拶やそれぞれに合わせた終わり方がなされていることから、形式に縛られない自由な書き振りのものが採録されているといえる。

金子彦二郎は『手紙文実習講話』の中で、頭語と結語の関係について口語文体の場合「口語文でありまして、最初に『拝啓』、もしくは『謹んで申し上げます』『手紙を以て申し上げます』などありましたら、最後には『さやうなら』と書いて置くべきであります」(p.124)としているが、読本においてはそれらにこだわらない採録がなされている。

「その他」の結語をみると、1933年版では「着きました、お過ごしなさいませね、給ひてよ、ゆかしや、奉り候、思うてゐます、致し居り申候、皆様にもよろしく、お大事に遊ばせ」、1937年版では「着きました、求めてまゐりました、致し居候、御笑覧下さい、給ひてよ、ゆかしや、思うてゐます、致し居り申候、皆様にもよろしく、待つてゐます、では又、下さいませ、これだけはいつでも大事ですね、お身お大事に求法辨道願ひます」がある。

書簡文という性質上、結語においては「かしこ」等の決まった言い方がみられるものの、「その他」においては、全体の書簡文の内容や相手との関係等に応じた書き方が容認されていたということが看取できる。このような点において、金子彦二郎の読本では、多様な書き方ができる書簡文の採録がなされていたといえる。前述したが、金子彦二郎が女生徒の書く意欲を高めるために返信等の採録を多くしたことが看取できたが、頭語・結語からも形式に縛られない、相手や内容に応じた自由な書き方ができる書簡文を採録していることが分かる。

以上のことから、金子彦二郎は、書簡文を形式的な型にはまった特化したものという考えではなく、書簡文も作文同様女生徒が意欲的かつ自由な発想で書くことができる、作文教材の一環として捉え教授していたと考えられる。

3. 考察

金子彦二郎の読本に採録された書簡文教材に注目し、その役割について議論した結果、次の事柄が明らかになった。

- ・内容の特徴から、金子彦二郎が書簡文を女生徒が興味をもって書くことができるように工夫して採録している。そして、女性として感謝の気持ちを忘れず、女性としての有様を正すといっ

た教訓的な内容の書簡文を読むことによって、女性としての生き方を捉えさせようとしていることが分かる。

- ・読本に位置付けられた書簡文教材は、日本語のよさを知る、書簡文を書く、読んで解釈するという役割を有していたといえる。
- ・1933年版、1937年版の書簡文採録には、法令によるものと金子彦二郎の書簡文への考えが反映されているといえる。金子彦二郎の考えでは、国が求める女性像に近付けるために書簡文を通して育てていく意図が看取できた。
- ・文末文体および頭語・結語の特徴から、書簡文を形式的な型にはまった特化したものという考えではなく、書簡文も作文同様女生徒が意欲的かつ自由な発想で書くことができる題材としての役割を有していたといえる。
- ・金子彦二郎の作文教授において重視された女生徒の主体性を生かし、自由な発想で書くことができるようにすることが、書簡文においても看取できた。ここには、書簡文を自由な発想で楽しく、個性豊かに書くための工夫がなされていた。

先行研究において、読本における書簡文の役割は読むことと書くことの両面から採録されていることは明らかになっている（中嶋真弓,2019）。しかし、金子彦二郎の場合、そこに女生徒の日常に合った自由に書くことができる題材として書く必然をもたせる工夫がなされていたところに新しさを見出すことができる。金子彦二郎にとって、書簡文は、連絡方法としての役割とともに、自由な発想を文章化する、作文と同様の位置付けの中で存在しているといえる。書簡文教材が、本来の伝達という役割のほかに、書簡文の形式を借りた作文教育の題材として、自分の思いを伝えやすい方法としてその形式が生かされたといえるのである。

本稿では、読本に注目し議論したが、金子彦二郎が編集した作文教科書である『新進女子作文』においても、同様な検証が必要であると考えている。

引用・参考文献

- 金子彦二郎（1917）「我が作文教授」国語研究会『国語教育』第二巻第七号，育英書院，49－53。
- 金子彦二郎（1935）『手紙文実習講話』三元堂
- 金子彦二郎（1938a）『昭代女子国文教授要領巻2』光風館書店
- 金子彦二郎（1938b）『昭代女子国文教授要領巻9』光風館書店
- 樺島忠夫・寿岳章子（1965）『文体の科学』綜芸社
- 北澤尚（1999）「明治時代の女生徒の書簡の文体」東京学芸大学紀要出版委員会『東京学芸大学紀要第2部人文科学』50,269－281。
- 田中宏幸（2008）『金子彦二郎の作文教育－中等教育における発想力・着想力の指導－』溪水社
- 中嶋真弓（2019）「吉田彌平読本にみられる書簡文教材の一考察－芳賀矢一読本との比較を通して－」全国大学国語教育学会『国語科教育』第85号，32－40。
- 野地潤家（1976）『作文・綴り方教育史資料上』桜楓社
- 野地潤家（1998a）『野地潤家著作選集第8巻 中等作文教育史研究Ⅰ』明治図書

- 野地潤家（1998b）『野地潤家著作選集第9巻 中等作文教育史研究Ⅱ』明治図書
- 茗荷円（2017）『近代日本女性書簡文の表現史研究』おうふう
- 文部省（1937）『国体の本義』